

石器群の比較研究に関するノート

新田 浩三

1. はじめに

現在、旧石器時代(註1)の報告書には石器(ツール)の実測図・属性と剥片・碎片の属性が記されることが通例となっている。この場合、石器(ツール)に対して剥片・碎片に関する論考はあまり行われていない場合が多い。一石器群(註2)の性格の把握のためには、その全遺物を対象にして分析し総合する方法が必要である。石器(ツール)の作出のされ方を解く鍵は、石器製作過程で生成された剥片・碎片にあるといっても過言ではない。すなわち、石器(ツール)のみの比較研究では、石器文化も正しく理解できず、石器文化の合法的発展の把握するには不完全である。そこで、石器群の全遺物を対象とする方法の確立が必要であり、これによってはじめて、石器群の比較研究がより正しい方向に導かれると考える。

ここでは石器製作時に焦点をあてた石器研究について述べることにする。人間が行動して残した資料を分析する場合、最も抽出しやすい形質は製作技術である。この点から考えれば、旧石器時代の数少ない資料のなかで最も優位を占める石器を分析するには、石器製作技術を復原するのが有効な方法の一つといえる。この場合、石器製作が人間の社会生活の中でどのように位置づけられるか石器製作の研究によって何がわかるのかという見通しをもって、基礎的データを蓄積していかなければならない。そのためには、稲田孝司氏の指摘するように、「石器文化の合法的な発展過程を追求するために……器種・型式のあり方と技術基盤の関係を構造化して把握する」(註3)方法が必要である。

2. 石器群の基礎的データの抽出方法(註4)

① 素材生産のあり方(剥片生産技術)

接合資料に基づいて行なう方法が最も確実である。しかし、実際に資料操作をする場合、接合しない資料が多い。そこで、石器にあらわれている

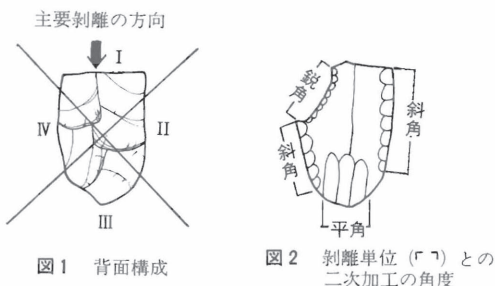


図1 背面構成

図2 剥離単位(F)との二次加工の角度

素材の情報の抽出作業を行なうことになる。それは、以下主に6つの属性によって分析される。

- (1)素材の種類……剥片・礫
- (2)打面構成……剥離面数とバルブをもつ数
- (3)剥離角
- (4)末端部形状……フェザーエンド(F), ヒンジフレクチュア(H), ウートラパッセ(A)
- (5)素材の大きさ……長さ・幅・厚さ
- (6)背面構成……図1のように主要剥離と同方向のものをI, 右位のものをII, 反対方向のものをIII, 左位のものをIV, 自然面をC, 節理面をJとする。

背面構成の分析では背面構成率と背面構成数という分析基準を設定した。

[背面構成率]: 背面剥離方向の割合を示すもので、ある背面剥離方向の数÷背面剥離の総数であらわされる。例えば、図1の石器はI 2, III 1, IV 1という背面構成をもち、背面構成率は $\frac{2}{4}$ I, $\frac{1}{4}$ III, $\frac{1}{4}$ IVということになる。

[背面構成数]: 背面剥離方向の種類数であらわされるものである。例えば、図1の石器はI・III・IVという3種類の剥離方向であるので背面構成数は3ということになる。

② 二次加工技術

一つの石器においても部位によって二次加工のされ方が異なる場合が多い。そこで、剥離の意味に応じて使い分けられる剥離作業である「剥離単位」という概念(註5)を引用して二次加工技術を分析することにする。例えば図2の石器の二次加工の剥離単位は4単位あることになる。

次に、二次加工の分類は、山中一郎氏の方法(註6)を原則的に踏まえて行なうことにする。

- (1)深度……短形・厚形・侵形
- (2)角度……鋭角・斜角・平角
- (3)剥離形状……魚鱗状・階段状・平行・細石刃状
- (4)様態……直線形・凸形・凹形・鋸齒縁形
- (5)素材の形態形状……形状修正的・形状保持的

以上主に5つの分類によって分析する。それぞれ分類されたものを、剥離の意味に応じた剥離単位を用いて、一つの石器の中にそれぞれの剥離内容が占める割合を深度率・角度率・剥離形状率・様態率・素材の形態形状率であらわした。これも背面構成率と同様の算出方法によって導かれる。例えば、図2の石器の角度は、2つの斜角と1つずつの鋭角・平角で構成され、角度率は $\frac{1}{2}$ 斜角、

$\frac{1}{2}$ 鋭角、 $\frac{1}{2}$ 平角ということになる。

3. 石器製作体系の構成

このようにして、石器群の基礎的データが抽出される。しかしながら、これらのデータは個別に分析しては石器群の性格を把握することはできない。石器製作を考えるには、〈素材〉生産のあり方(剥片生産技術)とその素材にあらわれる情報の抽出、そして素材の〈加工〉のされ方(二次加工技術)と加工されたものの〈形〉のあり方を一連のものとして石器群を把握の必要がある。これを石器製作体系の構成と考える。一つ一つの石器群の石器製作体系の構成を踏まえないで、石器群を比較することは意味がない。

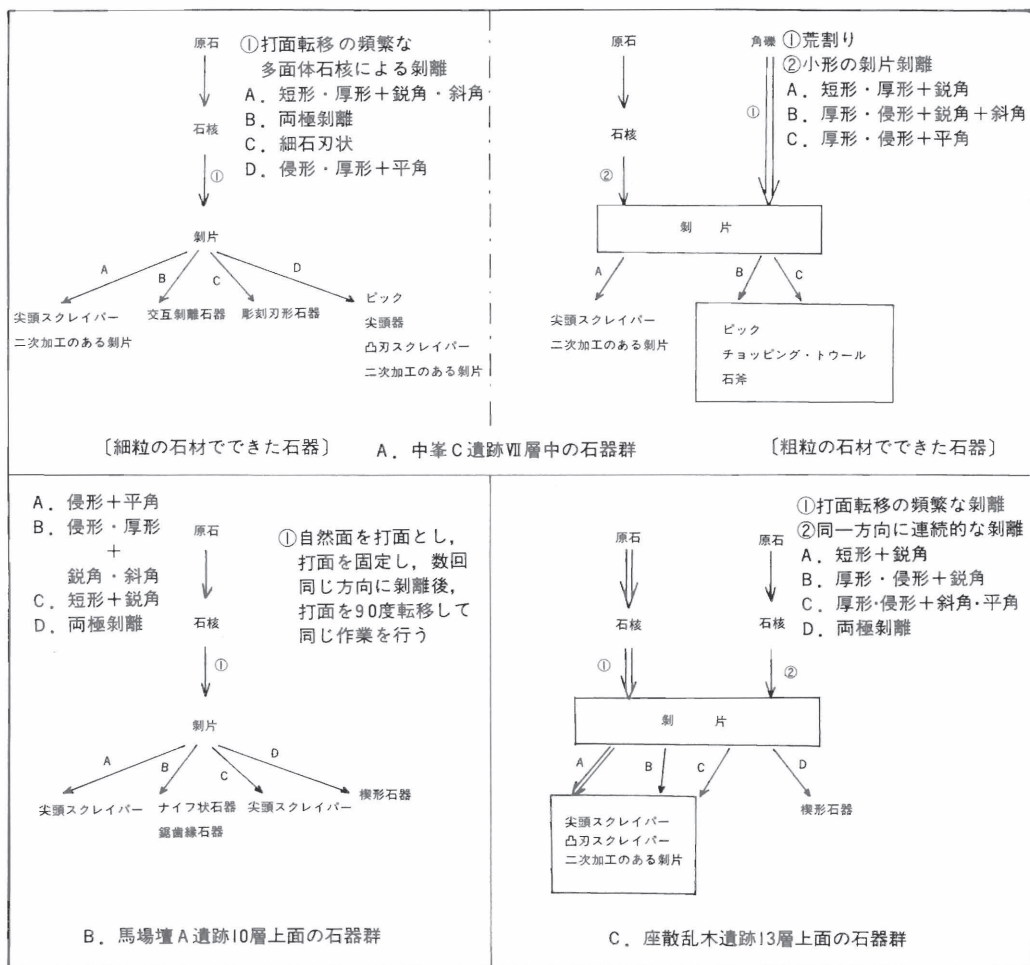


図3 石器製作体系の構成

4. 石器群の比較

石器製作体系の構成が行われた石器群は、次の分析操作として石器群の比較を行なう。

石器製作の時点に焦点をあわせた研究をしたボルドは「石器・剥片をトータルなかたちでとりあげ、形態のみでなく、製作に使われた技法をも含めて、それを石器の分類ごとにパーセントをだしまた種々の指数をだし、石器群の対比を試みる」(註7)方法をとっている。そこで、石器群の比較をする場合、まず第1に石器製作体系を比較(図3)し、第2に石器製作体系の中で分析した器種組成・石材組成・石器素材の種類・打面構成・背面構成率・背面構成数・深度率・剥離形状率・様態率・素材の形態形状率・折断部位率等による比較をすることになる(図4)。

5. 石器製作体系の構成とその比較の実践例

① 石器製作体系の構成 (図3) (註8)

(1) 中峯C遺跡VII層中の石器群 (註9)

細粒の石材のできた石器は、打面転移の頻繁な多面体石核による単一の剥離によって生産された剥片を素材とする。その素材は、多種の二次加工技術によって、多種の器種に作出される。粗粒の石材のできた石器は、荒割りによる剥離と小形の剥片を剥離する技術によって生産された剥片を素材とする。その素材は、Aによる加工とB・Cによる加工の2つの方法によって尖頭スクレパー・石斧に作出される。

(2) 馬場壇A遺跡10層上面の石器群 (註10)

単一の剥離①によって生産された素材は、大きさ・形状は不定形で、二次加工A・B・C・Dと

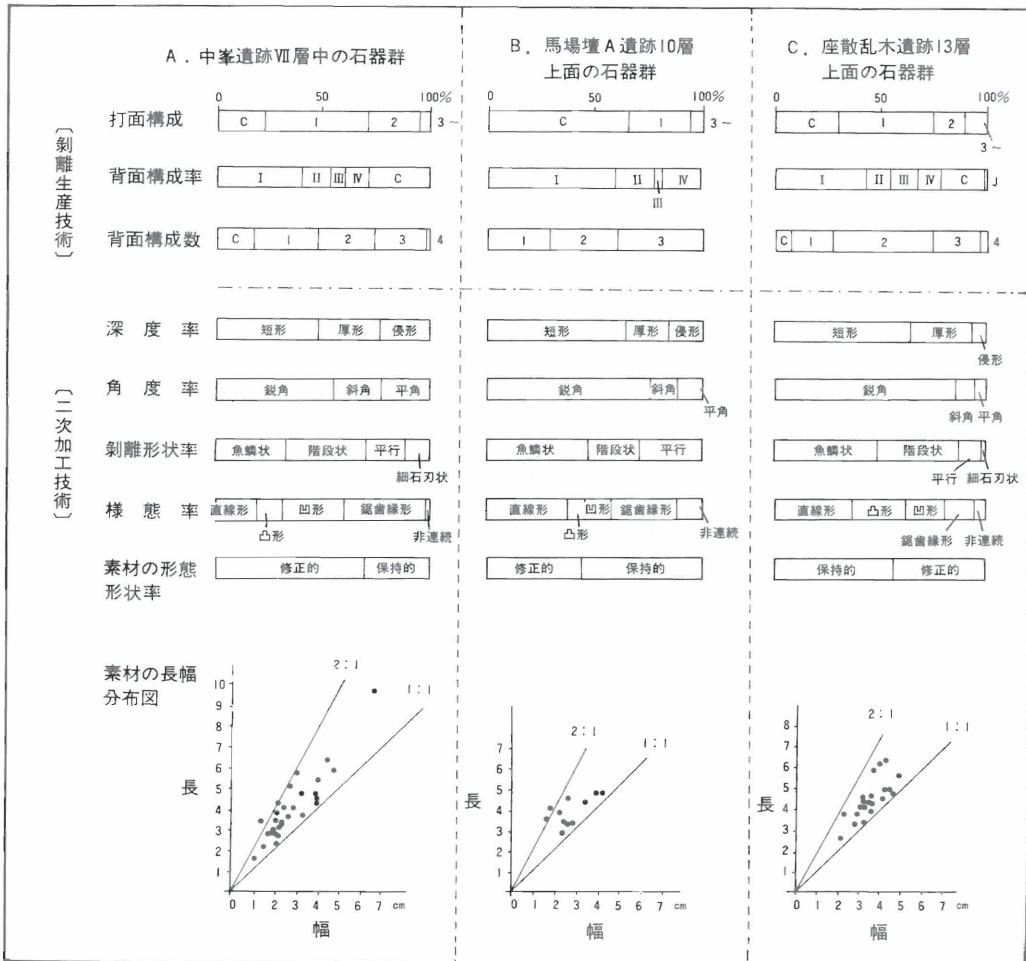


図4 石器群の比較

いう多種の加工技術によって多種の器種に作出される。

(3) 座散乱木遺跡13層上面の石器群(註11)

打面転移の頻繁なものや打面を固定し同一方向に連続的に剥離することによって素材を生産するが、前者を主体とする。素材の大きさ・形状はまとまりをもち、二次加工A・B・Cによって大部分が尖頭スクレイパー・凸刃スクレイパー・二次加工のある剥片に作出される。

② 石器群の比較研究

石器製作体系の比較を行ないながら石器群を比較することにする。三つの石器群は層位的解釈から、中峯C遺跡Ⅶ層中→馬場壇A遺跡10層上面→座散乱木遺跡13層上面の順番に新しくなるとされている。そこで、石器群の変遷を概略的に考察しつつ分析することにする。中峯C遺跡Ⅶ層中の石器群は、石材によって二つの石器製作体系をもつ。このことは、他の石器群には見られないことである。細粒でできた石器の剥片生産技術は、小形の原石を用いて打面転移を頻繁に行なう多面体石核による剥離を主体的に用いる。打面転移のされ方に注目して、他の二つの石器群をみると、馬場壇遺跡10層上面の石器群は、打面転移は頻繁に行なわれるが、数回同じ方向に剥離後打面転移をするようになる。次に、座散乱木遺跡13層上面の石器群は、中峯C遺跡Ⅶ層中の石器群と同じような打面転移をするが、素材の長幅分布図からわかるように、素材の大きさが大きくなる。素材の大きさは、年代が新しくなるにつれて大きくなる傾向があり、同じような打面転移のされ方でも、素材の形状は異なる。このような素材の形状の差異は、二次加工技術に密接に関連してくる。二次加工技術の深度率・角度率・素材の形態形状(図4)をみると、中峯C遺跡Ⅶ層中の石器群は、厚形・侵形+斜角・平角の加工を行ない、素材の形態形状を修正的なものの割合が高いのに対して、馬場壇遺跡10層上面・座散乱木遺跡13層上面の石器群は短形+鋭角の加工を行ない、素材の形態形状を保持的な割合が高くなる。これは、素材の形状が中峯C遺跡Ⅶ層中の石器群から座散乱木遺跡13層上面の石器群にかけて、しだいに不定形のものからまとまった形状のものに移行する。これに対応して、素材に対する加工率も低くなる。このことは

石器製作の合理化が進んだことを示すのかもしれない。

このように、三つの石器群を例にして、石器群の比較研究の方法を示してみた。それは、一つ一つの石器群の石器製作体系の構成→石器製作体系の比較→石器群の属性の比較の手順で行なわれる。

6. まとめ

石器製作時に焦点をあてた研究方法について述べてきた。物質を対象として人間を語らせるためには、物質の作り出し方、使われ方、残され方を追求し、演繹的手法を用いてこれらを総合的に解釈する方法がある(註12)。このような中に、石器製作技術の分析が位置づけられることを認識する。旧石器時代の研究方法では、石器製作技術の分析が、石器で観察できる最も確実な方法であるといえる。石器は「人間が自然環境に適應するために欠かせない技術的手段」(註13)と考えるならば、その技術的手段の一つとして考えられる石器製作技術を分析することは、人間の自然環境の適應の方法を探れる一方法と考えられる。

このノートでは、共存関係にある石器群を分析する場合の全資料を対象とした方法の一過程を示した。人間社会(文化)を復原する場合、それを動かしたのは一部の権力者ではなく、一般大衆の人間といえる。一部の権力者の行動様式は華やかであり、把えやすい面がある。しかし、それら一部の権力者を支えたのは一般大衆であり、その存在を考えないでは、歴史の動態は把えられない。これと同様に、石器研究の場合、石器があらわすものは、石器(ツール)のみではなく、剥片・碎片類を含んだ全資料である。数少ない石器(ツール)の形態は華やかであり、把えやすい面がある。しかし、石器(ツール)が作り出された背景は、剥片・碎片類に残され、その存在に立脚した石器(ツール)の把え方でないと石器文化は語れない。

このように、石器研究をする場合、全資料を対象とした方法論の確立が必要であり、この方法について今後活発な論議がされなければならないと考える。そして、この方法の確立によって、はじめ、石器群の比較研究がスムーズに行われるのである。

石器群の比較研究の目的は、石器群の変遷を発生→展開→盛隆→衰退→消滅という形で捉えて、その変遷の要因を考えることである。それはすなわち、旧石器時代人の生活の要求の変遷を探ることであるといえる。変遷の要因を考えるには、石器が何のために存在したかを考える方法があり、それを解く鍵は石器製作技術にあると考える。

註

- 1) 日本における縄文文化以前の文化内容の呼称として、先土器文化(時代)説と旧石器文化(時代)説がある。先土器時代説を主張する意見の中には、世界的な「旧石器→(中石器)→新石器時代」という、ごく一般的な概念で捉えられがちな時代区分と、それにもとづく時代概念、歴史構成をそのままあてはめてよいのだろうかという反省が背景にある(戸沢充則「日本の旧石器時代」『講座日本歴史1』P.72 1984)。しかしながら、私は以下主に3点の理由から旧石器時代の呼称を用いることにする。
 - ①日本で発見される石器文化が10万年をさかのぼることがほぼ確実となり、「先土器時代」というタイムスケールでは短い印象を受ける。
 - ②約3万年以前の石器文化の変遷が大ざっぱに検討できるようになった。それにより、世界的時代区分である中期旧石器時代・前期旧石器時代の他国の石器文化と比較研究する見通しができるようになった。
 - ③世界的にみて地域ごとにそれぞれの個々の文化内容の変遷をもつことは明らかである。それを、一律の旧石器時代の時代概念・歴史構成であてはめることはできず、あくまで「日本の旧石器時代」であることを認識した上で旧石器時代の呼称を用いればよいのではないか。
- 2) 一遺跡内の一層位における共存関係にあるすべての石製品を石器群とよぶ。
- 3) 稲田孝司「尖頭器文化の出現と旧石器的製作

の解体」『考古学研究』15-3 p.5 1969

- 4) 石器群の基礎的データを抽出する場合、属性に重みをつけたり、属性を組みあわせて分析する必要がある。また、石器製作を一連のものとして捉えるために、システマティックに属性を捉える方法が必要となる。例えば、二次加工において平坦剝離を行なう前段階の調整があり、これを一連の属性として捉えなくてはならない。
- 5) 竹岡俊樹「石器研究の方法とその見通し」『考古学基礎論』2 p.61 1980
- 6) 山中一郎「彫器研究法」『史林』58-3 pp.11~13 1975
- 7) 藤本強「概説」『日本の旧石器文化』5 p.3 1976
- 8) 約3万年以前の宮城県の石器群の比較を試みた。日本における約3万年以前の石器文化はおおざっぱにみて4段階に変遷すると考える。以下の3石器群は、各段階の石器文化の内容を良好にそろえている。それは、中峯C遺跡Ⅶ層中の石器群=第1段階(約13万年以前)、馬場壇A遺跡10層上面の石器群=第2段階(約13~4.3万年前)、座散乱木遺跡13層上面の石器群=第3段階(約4.3~3.3万年前)にあたる。

これは、小稿のまとめの基礎となった卒業論文による。卒業論文作成にあたり、安蒜政雄・岡村道雄・鎌田俊昭・柳沢和明各氏や石器文化談話会の方々に御指導・御教示を賜りました。記して、心より感謝いたします。
- 9) 小川出『中峯遺跡発掘調査報告書』pp.116~154 1985
- 10) 新田浩三『馬場壇A遺跡』I pp.48~51 1986
- 11) 阿部朝衛・小川出・佐久間光平『座散乱木遺跡発掘調査報告書』III pp.12~23
- 12) 藤本強「概説」『日本の旧石器文化』5 pp.6~9 1976
- 13) 赤沢威「先史学における解釈」『日本における旧石器文化』5 p.269 1976
(4班 芝山事務所)